
教育総合センター

だより

NO. 91

平成16.3.1

「あなたは何の仕掛け人ですか？」

スポーツ振興室長 前田 健一



一般的に「仕掛け」という言葉にはあまりいい印象はないだろう。動物の捕獲などにも使われているところから、だます手段、ごまかす手段という悪いイメージがつきまとう。そのくせ誰もが様々なところでその時々には大小の仕掛けをつくり、その結果に一喜一憂している。もちろん、「人」とつけばその専門家のことである。

私は学生時代に奇術をささやかな趣味とし、子ども達の前でよく演じた。奇術には高度な技術が求められる一方、演じる時にはある種の強制法というテクニックをさりげなく駆使する。観客の注意を術者の意図する方向に向けさせたり、意図するように思わせるのである。当然、観客はその意図に気づかない。そうして、観客の様々な驚きの期待に応える。虎視眈々と仕掛け探しをする観客を前にして、術後、観客の期待に応え、啞然とした観客の表情を見る快感が懐かしい。私が仕掛けを強く意識し始めたのはその頃からである。

これまで、私は仕事や仕事外でその時々立場を利用して様々な仕掛けづくりを行ってきた。仕掛けは目標達成の一つの手段であり、仕掛けづくりの過程ではおのずと行動が能動的となった。そして、その行動によって生まれた新たな発見は感動を生み、次の仕掛けづくりへの意欲とつながっ

た。そうした中で私がこだわったことは、相手をその気にさせる「しむける」仕掛けづくりであった。相手の考え方もあり、難しい上に時間と我慢を要したが、その分得るものも多かった。

仕掛けづくりには多くの情報と技術が必要であり、それらをその場の状況に合わせ、手順よく組み立てて表現できてこそ、想定する結果を導くことが可能となる。

私の実践例で言えば、仕事では美方高原自然の家に勤務していた頃、仕事外では今も続けている内モンゴル自転車旅行などがうまくいった例だろうか。時には独り善がりの仕掛けで思わぬ結果を招いたこともあったが、その都度教訓としてきた。

しかし、間もなく私も卒業である。これまで私が試みた仕掛けが、この地球上のどの分野でどの程度役立ったのか、自問自答することが多くなった。所詮、評価は他人がするものであるが……。

混沌とした世の中、卒業後も生涯現役にこだわりつつ、自然や人に優しい仕掛けにこだわる仕掛け人を目指し、挑戦し続けたいと思う。

今つくづく思う。先生達は、無から有を生みだす仕掛けづくり時間に時間をかけて取り組むことができる。また、それは、次代に受け継がれていくことにもなる。先生達の仕掛けづくりがうらやましい。

説明責任について思うこと

学校教育課長 織田 耕作

20 数年前に私が勤めていた小学校には通知表がありませんでした。理由はいろいろあったと思いますが、その分、個人懇談と授業参観が多くありました。授業参観といえ、全校のほか学年ごとの一日自由参観日などもあり、月によっては 2 ～ 3 回はありました。

通知表がないことから保護者の来校も多かったように思います。一方、個人懇談は時間も長く保護者の方の質問も結構厳しいものがありました。その一つの話です。

この方はアメリカから帰国された方で、子どもは帰国子女です。学習だけでなく心優しい子にと子育てに真剣な方でした。学習や生活についての懇談が終わる頃、「内容はわかりました。では学校はこれからこの子をどのように伸ばしていただけますか、遅れている点や課題についてはどう指導していただけますか。また家庭では何をすればよいですか、具体的に教えてください。」と質問(内容はもっと具体的でしたが)されたのです。個人懇談は何度も経験していましたが、この質問には正直とまどってしまいました。

この方の質問には教師として考えなければならぬ視点がいくつか含まれているように思います。例えば「子どもの状況について学校と保護者は情報を共有すること、その上で学校と家庭の役割分担の共通理解を図ること、学校は子どもの評価と併せ今後の具体的な取組とその到達目標を保護者に明示すること、家庭での取組についても具体的に提案すること」などです。

当時、私にはそんなことを深く考える力もなかったので、多分、脂汗を掻きながら必死にあれこれ言ってその場を切り抜けたのだと思います。

今、学校教育でも説明責任という言葉が盛んに使われるようになってきましたが、契約社会といわれるアメリカの生活が身についた方にとっては、20 数年前でも当然のことだったのかもしれませんが。

同じような話をアメリカ在住の日本企業の方がニューズレターに書いておられました。

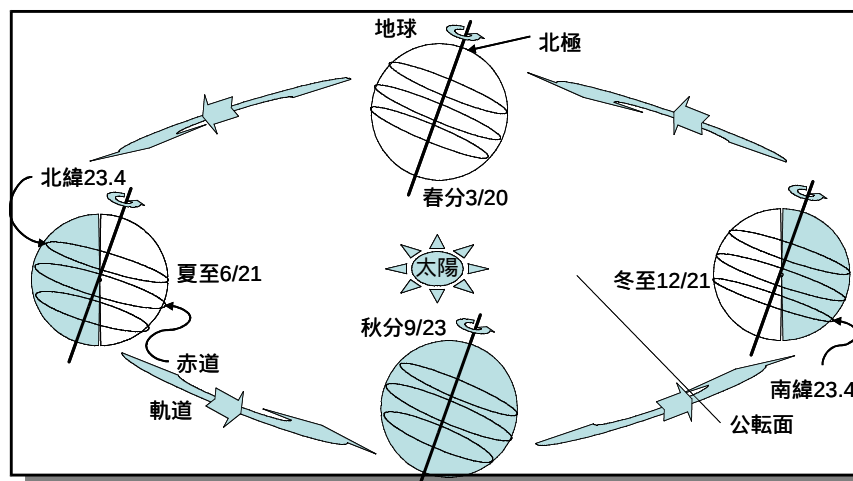
一口に説明責任といいますが、説明を求められているのは学校という組織だけではありません。日々子どもの教育に携わっている先生方一人一人にも求められているのです。個々の子どもに対して指導目標を設定し、評価し、新たな目標を設定していく、そしてそれらを説明していくこと、こうしたことは多くの先生方が日々行っておられることですが、今後、当然のこととして求められていくように思います。

保護者の価値観が多様化していることもあって、学校と保護者との間で様々な問題が生じてきていますが、学校・教職員が説明責任という言葉に十分応えられるようになってこそ信頼関係も強く築かれるものと、自分の反省も込めて思っています。

足し算で“みる”地球の軌道

1 もうすぐ春ですね(平成16年の暦をめくってみると)

もうすぐ春ですね。3月20日は“春分の日”です。昨年は3月21日でした。“春分の日”を辞書で調べると「二十四節気の一。太陽の中心が春分点上に来たときの称。(中略)昼夜の長さがほぼ等しくなる。」(広辞苑)とあります。ですから年によって変わるんですね。他にもう一日、昼夜の長さがほぼ等しくなるのが“秋分の日”ですね。理科の教科書でもおなじみの左図は、季節によって昼夜の長さが変わること



を示しています。

地球は太陽の周りをほぼ365日かけて1周します。地軸が傾いているので、昼夜の長さが変化することが図から分かります。

この図では春分、夏至、秋分、冬至が1年を4等分しているように見えますが、ちょっと待って下さい。本当にそうでしょうか？

じつは簡単な足し算をすることで、なんと地球の軌道が分かるんですよ。

2 足し算してみよう「春分から秋分までは何日でしょう？」

春分の日(3/20)～秋分の日(9/23)は、

- $11+30+31+30+31+31+23=187$ 日..... です。何かおかしいと感じませんか？

今年は閏年ですから、366日の半分で183日になるのではないのでしょうか。

では、秋分の日(9/23)～来年の春分の日(H17.3.20)は何日でしょう？

- $7+31+30+31+31+28+20=178$ 日..... となりますね。

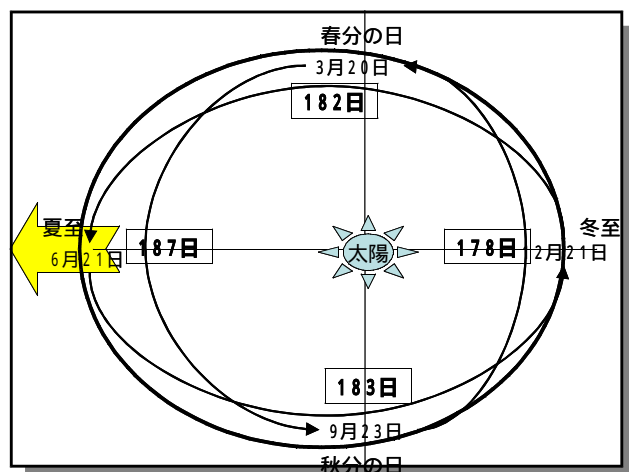
との差9日間はなぜ生まれてくるのでしょうか？

念のため夏至(6/21)～冬至(12/21) 冬至～夏至(H17.6.21)も足し算しておきましょう。

- $9+31+31+30+31+30+21=183$ 日.....
- $10+31+28+31+30+31+21=182$ 日..... となり、こちらはほぼ等しくなります。

3 地球の軌道は円ではないようです

、 、 、 の足し算結果から次のことが分かります。



- ・地球の軌道はじつは円ではなく楕円
- ・春～秋の軌道は秋～春のそれに比べて長いつまり、地球の軌道は左図の矢印で示したように夏側にふくらんでいるんですね。

上記のことが簡単な整数の足し算だけで確かめられます。小・中学校の授業に使えるのではないのでしょうか。組み直せば、高校でもおもしろい教材では。

ぜひ、使ってみてください。

教育総合センター
情報教育担当係長 上田 勝則

不登校児童生徒の支援について

「適応指導教室」(はつらつ学級)について
近年増加する不登校児童生徒に対して、
尼崎市では全国に先がけて平成3年度から
「適応指導教室」(はつらつ学級)を開設
しています。現在は立花西公民館(旧立花
西幼稚園)に併設している複合施設で定員
30名。心因性の不登校児童生徒が対象で
学校生活に適応できにくい児童生徒に対
して主に、個々の児童生徒の状況に応じた
学力補充をする ゲームやスポーツ等の
小集団活動を通じて集団活動適応力を身
につけさせる カウンセラーによるカウ
ンセリングを行う 基本的生活習慣の確立
をめざす等の活動を積み重ねながら、学校
や家庭との連携を深め不登校児童生徒の早
期の学校復帰を図ることを目標としていま
す。

入級については学校長と協議させていた
だき、さらに出席についても学校長の判断
で出席扱いとすることができます。

「訪問指導員制度」について

心因性の不登校児童生徒で学校にも適応
指導教室にも行けない児童生徒への支援と
して、家庭などに訪問して学校復帰への意
欲を育てる「訪問指導員」(9名)が全小
中学校を担当しています。当該児童生徒を
中心として学校及び「適応指導教室(はつ
らつ学級)」、そして関係諸機関等との連
絡調整をしながら学校復帰への支援をして
おります。

「ハートフルフレンド派遣事業」について

不登校状態にある児童生徒に対して兄・
姉に相当する世代で不登校の解消に情熱と
理解を有する大学生や社会人をその家に派
遣し、ふれあいを通じて自主性や社会性の
伸長を援助し、学校復帰への意欲を育てる
「ハートフルフレンド派遣事業」も大変喜
ばれ好評です。

いずれも児童生徒が一日でも早く学校に
登校できるよう支援する尼崎市独自の不登
校対策です。さらに、「適応指導教室」(は
つらつ学級)・「訪問指導員制度」・「ハ
ートフルフレンド派遣事業」等を活用する一
方、児童生徒や保護者が中学校に配置され
ているS・Cや心の教育相談室に入室しカ
ウンセリングを受けていくことは何よりも
不登校の解決に向けてきわめて大切なこと
です。

今後の課題としては、上記の不登校対策
関係事業等の活用をするとともに、担任と
して今まで以上に当該職員等と積極的に情
報交換をしながら児童生徒に働きかけ、よ
り連携を密にしていけることが求められま
す。また、児童生徒は担任からの訪問・連
絡を楽しみに待っています。さらに、学校
復帰へ向けて児童生徒を積極的に受入れて
いく態勢づくりも大切なことです。特に担
任として児童生徒や保護者に対して熱き思
いを発信していくことはとても重要なこと
です。

心の教育相談室

適応指導担当係長 芝垣 順

開 館 時 間 の ご 案 内

平 日： 午前9時から午後9時

ただし、教育相談及び視聴覚ライブラリー
は午後5時15分までとします。

なお、次の日は取り扱いいたしません。

【土曜日・日曜日・祝日・年末年始】

発行	尼崎市立教育総合センター 〒661-0024 尼崎市三反田町1-1-1 06-6423-3400
発行者	伊 藤 征 人
題 字	教育委員長 岡 本 元 興